

第 52 号(2012. 6.20 配信)

今回は「巨大建築」の話です。

前回の「スカイツリー」は、高い展望台から視界、周辺を眺め渡す楽しさが抜群。でも、通常、巨大建築とは言いません。ずぬけた高さのビルで、内部にオフィスや住居、集会場等が密集してこそ巨大建築と呼ぶのでしょ。私たちが子ども時代の「高さ比べ」では、どれも同列に考え、似たもの同士でした。世界最高のオフィスビルといえば、ニューヨークの「エンパイア・ステート・ビル」。長年にわたって超高層のトップでした。摩天楼という言葉も、英語の Skyscraper と合わせて早くから知りました。振り返ってみると、塔とかタワーとは違うという印象と認識が、子供心の奥底にひそんでいたような気がします。

先日、5 月末の日曜日、新聞のテレビ欄をひろげていたら、呼び名もズバリ「巨大建築」という番組が目に入りました。「NHKBS プレミアム」で午後 2 時から、と。記事を書くには打ってつけの参考になりそう、と興味を持って…。いざ始まると、民放ではないから CM や中休みなし。びっしり 3 時間、夕方 5 時までブツ通しの放映で、さすがに圧倒されました。新聞にあった「驚き！日本の底力／技術力と超絶の職人技／潜入！東京の最新巨大工事現場」との前触れ通りで、日本の巨大建築ヒストリーそのものでした。

技術革新、新素材の開発、軽量骨材の研究に普及等々の話は、学者先生の難しい講義調はなく、超高層屋上の撮影現場に揃ったのは、ソフトな徳田アナに、中尾彬、東貴博、秋野暢子といった視聴者受けする俳優たち。彼らが交わす質疑や感想に、工事や素材の改良などに実際にたずさわった技術者が、入れ替わり立ち代わり実技を示して説明する。流れが立ち話風というか、臨場感もあり分かりやすく、おかげで 3 時間連続でも、疲れを感じませんでした。

地震が多い日本では難しいとされてきた東京都心の高層ビル建築が、剛構造から柔構造に変わり、タワークレーンが活用され始めた契機が、霞ヶ関ビル(注 1)でした。当時の迫力ある映像には、納得以上に感動さえ覚えました。単なる解説にとどまらず、今なお前進する日本の巨大建築発展史の現状は、大層すばらしいと思います。

(注1)1965 年着工、68 年竣工・開業。36 階、高さ 147 メートル。

ここまでは、日本での動きですが、今回、私が取り上げたいのは、世界に広がる巨大建築の話です。さらに超高層のビル内で仕事を続け、あるいは住みつくる人々についてです。何のために巨大ビルを建てるのか？そこで働いたり住んだりしたいか？仕事の効率が高まるのか、居心地が優れて快適なのか？

『朝日』新聞の別刷り『The GLOBE』に、超高層ビルが話題が数々載っていました。中東、アラブ圏や中国で建設が相次ぎ、あの 9.11 に、テロ攻撃で倒壊した WTC(世界貿易センター)の双子ビルも再建・復活の予定だそうですから、この先、巨大ビルが話題は尽きそうにありません。(取り上げた『The GLOBE』紙は本年 4 月 15 日付。文中の引用はすべて同じ)

まずランキングからいしましょう。「高層建築と都市移住に関する国際委員会(CTBUH)」のデータをもとに作成され、高さ比較の対象は「全体の高さのうち少なくとも半分が実用フロアのビル」だそうで、「スカイツリー」は含まれていません。

高さ順に、ビル名、所在国、開業年を記します。

順位	高さ	ビル名(英語は表示通り)	所在国 - 所在地	開業年
1位	828m	ブルジュ・ハリファ / Burj Khalifa	ア首連(注2) - ドバイ	2010
2位	508m	台北101 / Taipei 101	台湾 - 台北	2004
3位	492m	上海環球金融中心 / Shanghai World Financial Center	中国 - 上海	2008
4位	484m	環球貿易広場 / International Commercial Centre	香港	2010
5位	452m	ペトロナスタワー1 / Petronas Tower 1	マレーシア - クアラルンプール	1998
6位	452m	ペトロナスタワー2 / Petronas Tower 2	同上 - クアラルンプール	1998
7位	450m	紫峰タワー / Zifeng	中国 - 南京	2010
8位	442.1m	ウィリスタワー / Willis Tower	米国 - シカゴ	1974
9位	441.8m	京基100 / Kingkey 100	中国 - 深圳	2011
10位	439m	広州国際金融中心 Guangzhou International Finance Center	中国 - 広州	2010

(注2)「アラブ首長国連邦」の略称。正式の国名は、United Arab Emirates。その略称の「UAE」で通っているのは、米国の「USA」と同様。なお、首都はアブダビ。人口 518 万 8 千人(うち市民権保有は約 90 万人)2010 年推計(出典:ブリタニカ国際年鑑 2011 年版)

高さ順の 10 位までに、摩天楼といえば代名詞みたいだったニューヨークには今や 1 件もない。幸いにもというべきか日本にも 1 件もない。超高層 10 位にはいる当事者でないのですから、クールに客観的に考えられそうに思われます。

マンハッタンに高層ビルが林立し始めたのは、20 世紀の初めだそうです。島の面積は、東京の山手線の内側ほどしかない。高層化は土地を有効に使い、マネーを呼び込み稼ぐ知恵だったとしか言い様がありません。以来、1 世紀が経っています。2001 年「9. 11」当日、乗っ取られた航空機がツインタワーに突っ込んだ WTC は、1970 年代前半にできたので、はるかに奥手です。しかし幾十年にもわたって、超高層を建て続けたのは、狭い土地を有効に活かすためとはいえ、資金力もともかく、それをカバーして余りある儲けが期待できたからではないか。次々にマネーを注ぎ込み、富を積み上げる手立てと考えられます。紙面に登場する摩天楼博物館のキャロル・ウィリス館長は「摩天楼を生んだのはマネー。少しでも多くの商業フロアを街にもたらす、それが WTC の使命だった」と語っています。

中東、中国の新・摩天楼はどうなのか。金力か権力かを誇示する巨大化なのか。

土地や富との関わりは、超高層の元祖マンハッタンとは、かなり異なるように感じます。ここに至った歴史も背景も、それぞれ特有と考えられます。例えば、ただ今高さトップのドバイ。私も海外出張などの途中で 2 回立ち寄っていますが、無論そんな高層ビルはない時代で、高さ 1 位が現れるとは予想さえしませんでした。最近の現象と考えます。

世界一の超高層ビルに住むと想像すれば、どうなるでしょう。ア首連が位置するペルシャ湾岸地域は、1 年中、雨はほとんど降らず毎日快晴。天気予報など新聞にない。すると、朝日を受け、巨大なビルの影が数キロ先の海岸まで伸びる、毎日、そんな風景を見ながら目覚めるということか。

「ブルジュ・ハリファ」の記事を読むと、結構な話が目につきます。居住部分が 19 階～108 階。広さの 1 例が約 110 平米。専用ラウンジ、ジムやプールなどが利用でき、レストランなども割安で利用可能。家賃が月額・邦貨に換算して 24 万円？ えっ！ホント？と、びっくりするほど、東京の都心部より割安に感じるのでは？ 仮に中東に魅力を感じ、適合した仕事に定着できれば、住み込むのも一策かもしれません。ただし食生活には、大層な難儀を覚悟せねばと思われそうですが…。

中国と周辺地域には、また別の見方が必要です。政治、経済に問題、課題を抱えていますから。年内に開かれる予定の党大会あたりまでは、とにかく様子見が賢明でしょう。

マンハッタン島の WTC に話題を戻します。現況をいえば、テロ跡地「グラウンド・ゼロ」では、すでに朝から重機がうなり工事が進行中とか。もっとも 4 月の報道ですから、すでに数ヶ月を経過している今は、さらに状況は変わっているのでは？「以前よりすごいビルを建ててみせる」「あの場所に再び高いビルを建てるのが、自分たちのリベンジだ」と叫ぶ壮挙ですから、もう止めようがないのは確か。80 歳の不動産業者ラリー・シルバーステイン氏は、壊滅した WTC の一角 88 階にオフィスがあったけれど、9.11 にはたまたまオフィスを空けていて命拾いをしました。今も WTC に賃借権をもち、跡地再建派の 1 人。

「私はニューヨーク(NY)に育てられた。この街にはタワーが要る」と。

アラブや中国の新高層人は別として、人間は、育った社会、住み慣れた街に適応して働き、住み着いていくのが普通で、シルバーステインさんは典型的な NY っ子。「タワー」に住む宿命がありそうです。しかし平屋や中層の住まいから、いきなり何十階の高さに移住しても、落ち着いて平常な働きや生活ができるかどうか疑問を拭えませんが。私たちジャイカ人も、新宿副都心の高層ビル内のオフィス 44~48 階で仕事を重ねた体験を持ちます。

私自身は、海外勤務中の住居事情から、特に違和感はなかったけれど、高層ビル内では「窓を開けられない」「室内の空気がよどむ」等々の問題があったと聞きました。まして地震、停電などの事件や事故対策をしっかり立てて訓練も重ねないと。安全・安心が強調される時代ですから、今日の東京はじめ日本の大都市の巨大建築は、地盤の歴史や現状の調査、点検を徹底し、高さ 200m 級の現況が限界に近いのではないかと考えます。

超高層に定評があるとされる、シカゴが本社の大手建築設計事務所 SOM の建築家ドリアン・スマイス氏は『The GLOBE』紙上で、技術的には高さ 1600m も可能だと、次のように語っています。—「中東も中国も、新たに生まれる新都市は、存在を世界に知らせる必要性を痛感している。超高層は、最も効果的な手段の一つだ。事業の成功は、その国の精神高揚にもつながる。開発業者には経済的理由が、国のリーダーには政治的な意義がある」。その上で、「超高層ビルを一つ建てるたびに関連技術が 10%進むが、まだ建築家が少なく、技術の蓄積がある建築家は限られる。現時点での試算では、高さ 1 マイル(約 1600m)まで設計できる」と。たぶん可能でしょう。しかし、それでいいのだろうか。

建築家はそれぞれに美術、文化の理想を持っているはずですが。人間と空間の関係に、どう理想を実現したいか。そう考えていくと、超高層の巨大建築ではないように思われますが、いかがですか。

(6 月 14 日記。国際サブロー)